

●魚を射程に入れる



【泳いで近づく】

泳いで魚との距離を詰める場合、魚に警戒心を与えないことが何より重要だ。真っ直ぐ魚に向かって泳いでいくのではなく、違う方向へ泳ぐなどしながら、徐々に近づいていくのがコツ。なかなか射程に入らないときは、瞬間的にダッシュして一気に距離を詰め、手銃を打ち込むのも、ひとつの方法になる。



【魚が近づくのを待つ】

つねに速いスピードで泳ぎ回る魚は、泳いで近づくことが難しい。手銃を構えた状態で岩の陰などに身を潜め、息を止めて魚が近づいてくるのを待つのが手だ。岩の陰や海藻の間などに隠れ、岩を擦るなどして音を立てて寄せるのも有効。こちらの姿が見えなければ、魚は警戒することなく近くまで寄ってくる。

【魚を突く】

潜る際は、あらかじめゴムを70%ほど伸ばし、手銃の柄に付いている「レストタブ」に固定しておく。魚に近づくときは、射程に入ったときにいつでも突けるよう、ゴムをレストタブから外して伸ばし、手に持った状態で手銃の柄の中ほど（柄の重心部分）を握っておく。突く際は、腕を伸ばし、脇を締めて照準がズレないようにするのがコツだ。柄を握った手を緩めれば、手銃は前へと突き出ていく。

魚の真上や前後から突こうとすると、的が小さくなるので、魚の側面が見えるポジションをとるのがベスト。たとえば魚の後方から近づく場合、なかなか魚の側面をとらえることができないので、対象を確認したらいったん浮上し、息を整えてジャックナイフで潜り、潜る勢いとマイナス浮力を利用して、漕がずに斜め上から近づくのがひとつの方法となる。魚は、目の斜め後ろを突けば即座に絶命する。とくに大型魚は、身を突くことで激しく暴れ、取り込むことが難しくなるので、突く位置は重要だ。

射程は、手銃の長さ、ゴムの長さ、初速の速さなどによって変わるので、身をもって知るしかない。もっとも、できるだけ近くから突いたほうが当たる確率は高くなるので、射程を知ると同じくらい、魚に警戒心をもたせないように近づく技術も必要だ。なお、魚との距離を詰める際も、手銃を突き出す際も、自分が興奮したり、魚と眼を合わせたりすると、必ずといっていいほど逃げられるので、落ち着いて突くことが大切だ。

対象とする魚が逃げた場合、それが突く前でも、突いて体に当たったあとでも、警戒心が最大になり、再度突くことは難しくなる。ただし、対象が青物などでなければ、浅い穴や岩の下などに逃げ込んだところを、再度突けることもある。

【浮上する・取り込む】

突いた魚が大型の場合、ゴムを持って引き上げると、魚が抜けたときに銃が自分に向かって飛んできてくることがある。必ず銃の柄を持って浮上しよう。

浮上したら、フロートに付けたストリンガーに魚のエラを通してから銃先を抜く。大型魚は、絶命したと思っても、銃先を抜いた瞬間に暴れる場合があるので、まずストリンガーに通すこと。チョッキ銃は、柄と接続している紐をほどけば抜ける。それ以外は、銃先を岩などに押さえつける、いわゆる「押さえ」をして抜く。

魚を取り込んだら、つぎの獲物を探しにいこう。ただし大型の場合は、何匹もストリンガーに通した状態では水面を泳いで移動するのもままならないので、1匹突いたら上陸するのが普通だ。

無理は絶対禁物

スピアフィッシングは水中で行うため、ちょっとした事故が命を失うことにつながる。体調不良、睡眠不足、天候・海況が悪いなど、不安要素があるときは無理して潜らないことが、事故回避の大切な考え方だ。

小島氏は、安全に対する心構えについてこう語る。「本当の大漁は、無事に家族の

元に帰ること。魚には、またこれからいつでも出会える。獲れるチャンスはやってくるから無理はするな！家で家族が待っていてくれる！」。この言葉を肝に銘じ、安全第一でスピアフィッシングを楽しもう。

●深い場所で突いた場合



息が続かないほど深いところや、突いた魚が根の穴から出てこないなど、回収が困難になることが予想される場合は、あらかじめ手銃の尻手にヒモを結んでおく。魚を突いたら手銃ごと放置して浮上し、改めて回収しよう。それでも無理なら、仲間を呼ぶなどするが、そもそも回収が可能かどうか、よく判断して突くことも大切だ。